



SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS



その日あったことなどを話しながらボランティアのお母さんたちと楽しそうに晩ごはんを食べる子どもたち

誰一人取り残さない 地域社会のために

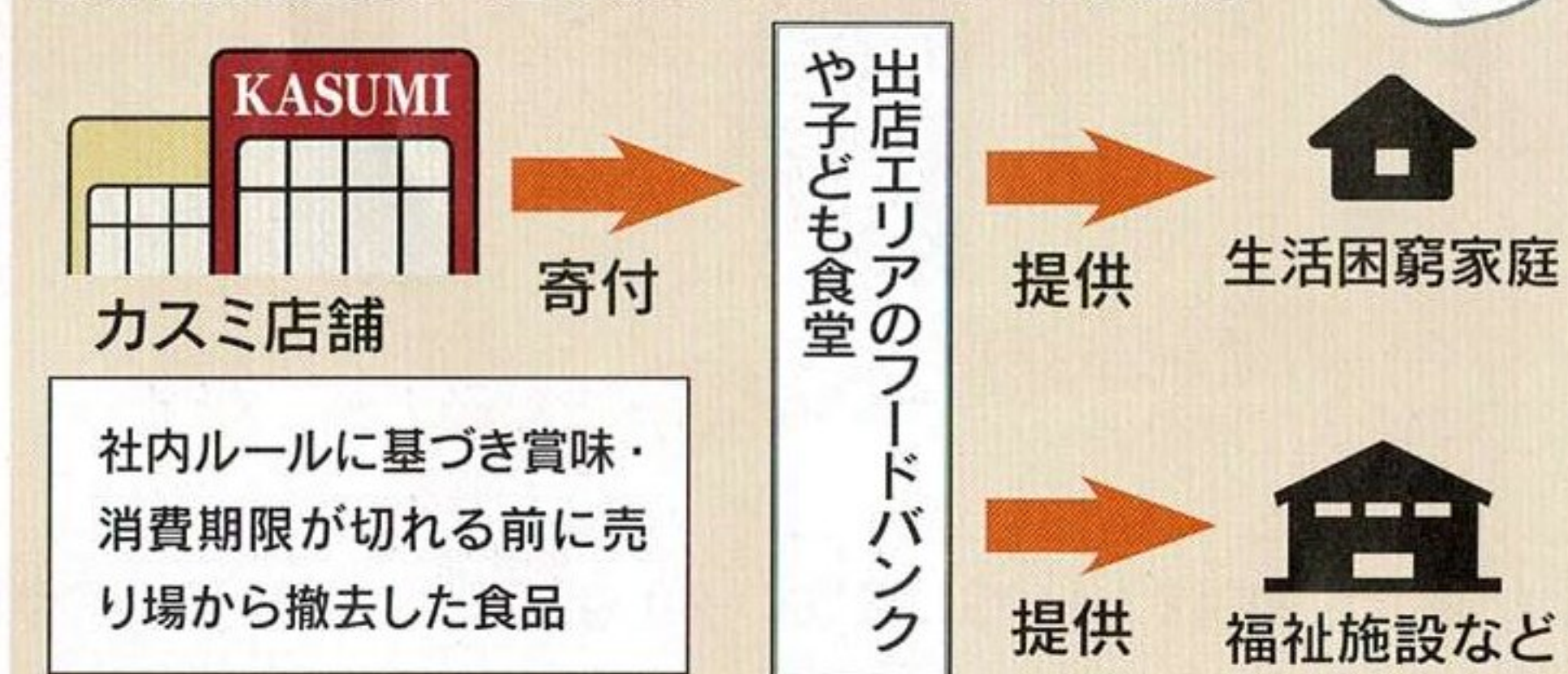
が子どもたちの役に立ちたくて」と、定年退職後にボランティアスタッフとして子ども食堂を手伝っているお父さん(写真①左)。ふだんは子どもたちに勉強を教えたり、送迎車の運転もしていますが、この日は近隣にあるカスミの店舗7軒を回ります。月2回、カスミが寄付する食品を受け取るためです。

カスミは2016年11月から出店エリアでフードバンク活動を続けており、2020年11月末現在112店舗で実施しています。フードバンク活動とは品質上問題なく安心して「まだ食べられる」にもかかわらず、賞味・消費期限の管理のために廃棄される食品を、子ども食堂や福祉施設など必要とする人の元に寄付する活動。この日は缶詰、菓子、飲料などを寄付しました。

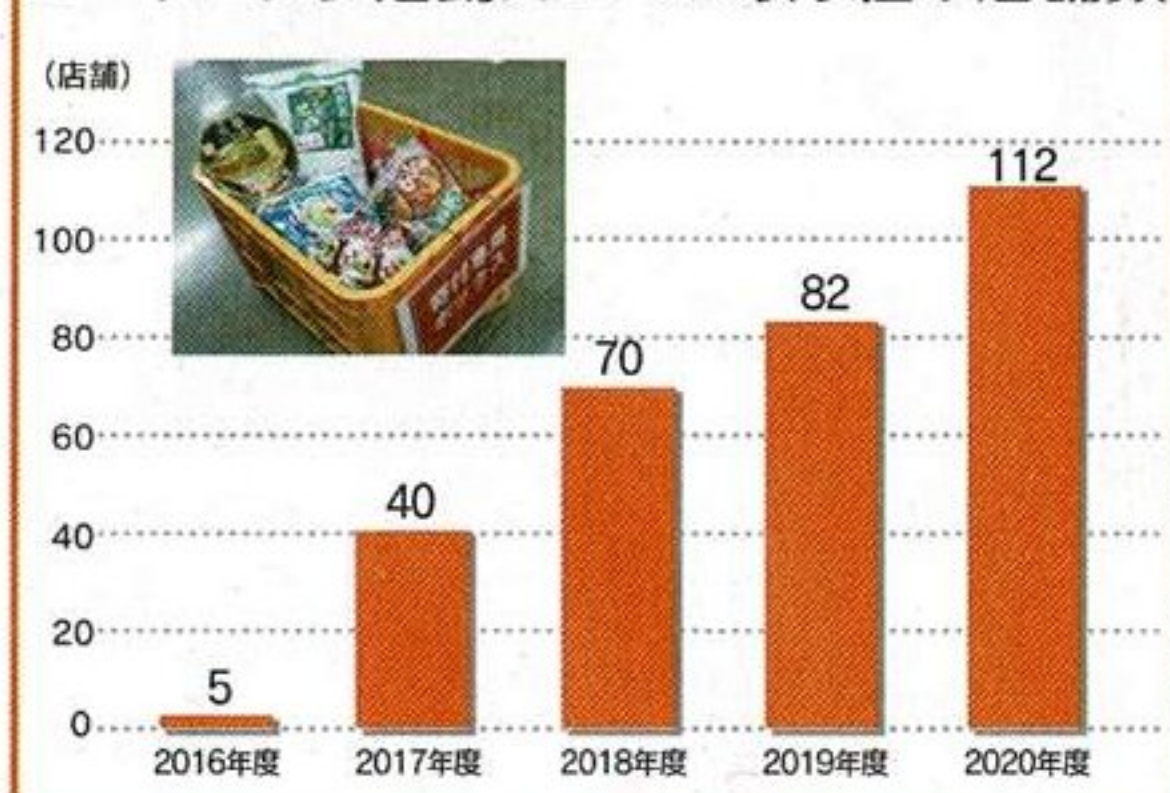
全国に約4千カ所ある子ども食堂ですが、コロナ禍でその多くは従来通りの運営が難しくなりました。認定NPO法人「NGO未来の子どもネットワーク」も感染拡大を防ぐため3月初旬、コロナ禍で子どもたちが集まるのができなくなったため、食堂をお弁当に変えて宅配で活動が続けました。そんな中、子ども食堂を利用していない、コロナ禍で影響を受けた生活困窮家庭から相談が寄せられ、4月からお弁当を届ける活動を拡大しました。

カスミは「誰一人取り残さない」というSDGs達成に向け、これからは食品ロスの削減や貧困など社会課題の解決に地域の皆さんと一緒に取り組んでいきます。

地域社会と連携して進めるカスミのフードバンク活動



フードバンク活動カスミの取り組み店舗数



①寄付食品を受け取るボランティアのお父さん(左)②子ども食堂に運び込まれた食品はボランティアのお母さんたちで仕分け③カスミの店舗を回るのは月2回



コロナ禍で子どもたちが集まらなくなったためお弁当をつくらせて宅配しました



ハロウィンの日のメニューはお母さんたちの手づくりハンバーグ!



下駄箱からも元気な「ただいま」の声が聞こえてきそう



認定NPO法人「NGO未来の子どもネットワーク」
2014年から茨城県龍ヶ崎市の閉院になった医院で子ども食堂、無料学習塾を開設。制服やランドセルの支援、食品や日用品の宅配、海外の子どもたちへの支援など貧困世帯の子どもへの支援活動を幅広く実施している。会員数約100名、ボランティア登録者数約80名。

まだ食べられる食品を
使いたい人の元へ

カスミのフードバンク活動

安心と笑顔を「食」でつなぐ 地域の子ども食堂

お腹をすかせた子どもたちに、食事を提供する子ども食堂。茨城県龍ヶ崎市の認定NPO法人「NGO未来の子どもネットワーク」もその一つです。カスミは子ども食堂の貧困問題解決と食品ロスの削減のために、子ども食堂への食品寄付を通じフードバンク活動を推進しています。

みんなで持ち寄り みんなで食べる

いま日本は子どもの7人に1人が貧困状態にあります。こうした中、お腹をすかせた子どもたちに無料または安価で栄養のある食事や団らんを提供する「子ども食堂」の取り組みが全国で広がっています。

その中の一つ、茨城県龍ヶ崎市の認定NPO法人「NGO未来の子どもネットワーク」は週5回、貧困や虐待などの

事情を抱えた未就学児から高校生を対象に子ども食堂と無料学習塾を開いています。代表の笠井広子さんを中心に、有志が集まって2014年から運営を継続。現在は約80名のボランティアが登録し、地域の子どもたちのために活動しています。

訪れたこの日は10月31日のハロウィン。調理室ではボランティアのお母さんたちが和気あいあいと、でも忙しそうに料理をつくっていました。材料の多くは寄付で賄っています。ふと見ると調理室の入

り口に、なぜか「診療時間」の案内プレート。建物は閉院になった地元の病院が無償で提供してくれているのです。

「ただいま」。夕方になると子どもたちが学校から帰ってきました。ランドセルを放り投げ、じゃれ合ったり、輪になって遊んだり。子ども食堂には子どもたちの歓声があふれていました。

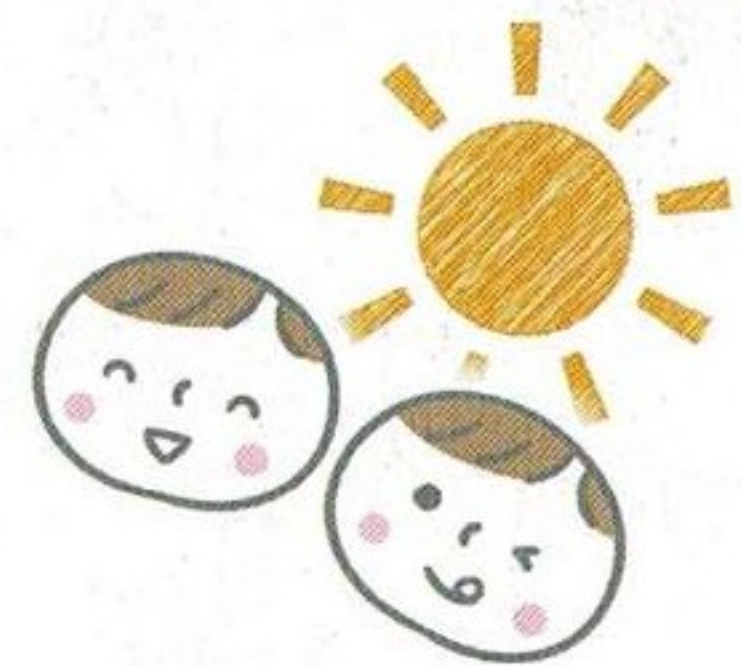
一段落したところでみんなで食事。この日のメニューはハロウィンに合わせ手づくりハンバーガーとさつまいものスティックフライ。ボランティアのお母さんたち



子どもたちが帰ってくる前に調理をするボランティアのお母さんたち

※1) 厚生労働省の調査によれば、日本の子どもの貧困率は13.5%。18歳未満で平均的な所得の半分(127万円)未満の世帯で暮らす子どもが増えている。学力や健康にも影響を及ぼし、社会問題化している。

※2) SDGs(エスディーエーゼス: 持続可能な開発目標)とは誰一人取り残さないを理念に地球環境、地域社会、人間の暮らしをよくするために国連で合意した世界共通の目標。



子ども食堂 “今”と“これから”



誰一人取り残さない共生社会のために

株式会社カスミ取締役会長

認定NPO法人「NGO未来の子どもネットワーク」代表理事

小瀨 裕正 + 笠井 広子氏

経済的、社会的に弱い立場の世帯の子どもたちに重くのしかかるコロナ禍。

その中で、地域の子ども食堂が「安心」を届けています。

背景にある子どもの貧困問題と地域社会のありようについて語り合いました。

お金とつながりの不安が 子どもの貧困を生む

小瀨 私は育った環境が母子家庭でしたから、世が世なら子ども食堂のお世話になつてたでしょう。食べるものがなくてお腹がへつたときなど、道端に落ちていたものでも土だけ払って妹に食べさせたこともありました。

笠井 当時、どんなことが一番生きづらいつ感じましたか？

小瀨 学校ですね。幼い妹を学校に連れて行きたくても、みんなからアレコレ言われるだろうと肩身の狭い思いをしました。

笠井 そこですね。持続可能な社会と言いつながら、日本では貧しい人は肩身が狭いと感じてしまいます。

小瀨 なぜでしょうね？

笠井 カンボジア支援を20年以上続けていますが、あちらの子どもは弟や妹をおぶつて学校に行くことが普通です。初めてカンボジアに行つて驚いたのは、「貧困」という言葉がないこと。そのとき気づいたんです、貧困という言葉を使うのは豊かな国だけなんじゃないかと。

たとえ自宅がばら家でも、カンボジ

アでは隣の家と比べて負

目を感じたりしま

ん。貧しくても

仲良く暮ら

しています。

おいしそう！

お母さんたちの

手づくり弁当です！



小瀨 みんなが貧しいからでしょうね。

今、全国で子ども食堂の活動が広がっています。その役割をどのようにお考えですか？

笠井 誰もが集える交流の場と位置づけている子ども食堂もありますが、私たちはあえて貧困の子どもだけを対象にしています。それは本当に困っている子どもたちを助けたからです。

小瀨 子どもの貧困と聞いても、今の日本ではあまりピンとこない人も多いのではないかと思います。厚生労働省の調査では子どもの7人に1人が貧困状態にあると言われています。

子どもの貧困の定義は「平均的な可処分所得の半分（127万円）を下回る世帯で暮らす子ども」ということですが、現場感覚としてはどのようなこととらえていますか？

笠井 分かりやすく言うとお金だけでなく、いろいろなことが足りなくて困っている」ことを私は貧困ととらえています。

たとえば、給食や文具や制服など学校に関する費用がいつも足りないだけでなく、そのことを相談する大人がいなかったメンタル面の不安も子どもの貧困につながっていると思います。

課題を共有し 共感の輪を広げる

小瀨 子ども食堂を始めたきっかけは何だったのですか？

笠井 もともとボランティアでホームレス支援に関わっていたんですが、18年前に子どもの電話相談を始めて、その後10年間で約7万人の子どもの生の声を聞き、貧困の実態を知ったのがきっかけでした。

ある小学3年生の女の子が電話をかけて

きて「冷蔵庫にシヤケ缶が一缶だけあるんだけど、これだけで1週間もたせるにはどんな食べ方をすればいい？」と聞くので、「どうして？」と聞き返すと、「お母さんは水曜日だけ帰ってくるんだけど、今週は帰って来なくて」と。そういう電話が少しずつ増えてきて、電話相談だけでは子どもたちのお腹は満たされないうちに始めてみました。

小瀨 カスミは地域の福祉施設などに食品を寄付するフードバンク活動を続けてきました。現在、カスミ全体の6割に当たる112店舗（2020年11月末現在）で実施していますが、このほど地域の子どもの食堂への寄付も始めました。

私が初めてフードバンク活動を知ったのはアメリカでした。スーパーマーケットの店頭保管箱が置かれていて、その中にまだ食べられるのに不要になった食品を従業員が入れていく。お客さんも家から持ってきてくれるんですよ。

おそろく最初は食品を有効利用したいという考えから始まったと思うんですが、やがて食べ物が必要としている人に使ってもらう方が価値があるという認識に変わったのではないかと思います。

笠井 カスミさんから食品を寄付していたんだけど、ある若いカスミの店長さんとお会いしたときの言葉が私は忘れられないんです。

「この活動で手間が増えちゃって申し訳ないですね」と私がこあいさつしたら、「僕はスーパーに入社して、こういうボランティア活動に参加できるとは思っていませんでした。でも、こういうチャンスを与えてくれる会社に入社して良かったです」とその店長さんがおっしゃって。こちらがお礼を言われた

ようであれしくなりました。

小瀨 ありがとうございます。

それは大変うれしいお話ですね。

スーパーマーケットは食品の提供が役割ですが、それが全てではないと思っています。

お店のある地域にはさまざまな人たちが生活していて、それぞれに課題を抱えています。でも、従業員がお店の商品補充のこ

とばかり考えていたら、そういうことに思い至ることもできません。ですから従業員がさまざまな社会貢献活動に参加できる「場」をつくる

ことが重要だと考えています。

カスミは地域に木を植える植樹祭や被災地を支援する活動などを続けていますが、フードバンク活動もその中の一つです。社会貢献活動に従業員が参加して地域の皆さんと課題を共有することが、一緒に解決していこうという意識を育てることにつながる

と思っています。



ハロウィンのこの日のメニューは子どもたちのリクエストに応じてハンバーガーとさつまいものスティックフライです！



小瀨 裕正
(こはま・ひろまさ)

株式会社カスミ取締役会長
2000年株式会社カスミ入社。2002年から
2010年まで代表取締役社長、2010年に代
表取締役会長。2017年より現職。2018年
5月から2020年5月まで日本チェーンストア
協会会長。



(小瀨)

子どもの貧困対策や食育を通じ地域と 連携して社会課題の解決に貢献したい

笠井 これから子ども食堂を始めたとい
う方から「開設資金はどうしたらいいん
ですか?」とよく聞かれるんですが、私はいつ
も「資金がなくても、とりあえず始めるこ
とです」と答えています。資金がないとや
らない活動って、たぶん淘汰されてしまいま
すから。

小瀨 その通りですね。

笠井 無茶かもしれないけれど資金は後回
し。必要と感じたら、まず始めることです。
今、私たちは週に5日活動していますが、
困っている子は週に5日だけ生きているわけ
ではありません。だから1年365日、生
きるために食べられる場所をつくりたいので
すが、現状では人が足りません。

毎日運営するとなるとボランティアスタッ
フだけでは難しくなりますが、利用者の守
秘義務の問題もあり、むやみに人を増やす

わけにもいきません。

小瀨 やはりマンパワーが一番の課題なので
ですね。

でも、人を増やして組織を大きくすれ
ば課題を解決できるとは限りません。この
コロナ禍は経済的、社会的に弱い立場に置
かれた人たちの存在を改めて浮き彫りに
しましたが、これを機に地域の中で見落と
されてきた子どもの貧困について、より多
くの人に関心を持ってもらうことが大切で
しょうね。

笠井 SDGsは誰もが安心して生活を営
める地域のための目標ですが、その対極に
あるのが子ども食堂ではないかと思ってい
ます。子ども食堂が増えるということは
地域の中に困っている子どもが増えていると
いうことです。そう考えると子ども食堂
のいない地域をつくっていくことが、「誰」

人取り残さない」を誓うSDGsにつながっ
ていくと思います。

小瀨 貧困を考える上で大切にしている点
は何ですか?

笠井 生まれながらに困っている人に、「困っ
ているのは努力が足りないから、怠け者だ
から」という意識を持つべきではないと思
います。「貧」を見ないで「困」を見ることが大
切だと思っています。

小瀨 子ども食堂では食事の提供の他にも
さまざまな活動をされていますが、子ども
たちが喜ぶのはどんな活動ですか?

笠井 お墓参りは喜びますね。子ども食
堂の施設を無償で提供してくれている大家
さんの、亡くなったご主人のお墓参りに行
く話をすると、「私も行く行く」とみん
な喜んで付いてくるんです。先祖代々や家
族のお墓がない家庭の子が多いですから。

小瀨 生活行事や年中行事も成長には必
要な経験です。ただ食べるだけでなく、お
年寄りや大人と対話しながら健康に良いも
の、旬の味、地域の食習慣といった知識を学
びながらの食事は成長期にとても重要です。

笠井 近ごろ高齢者福祉施設で子ども食
堂を運営する施設も増えています。地域の
高齢者がいて、子どもがいて、それに支援す
る大人がいて、安心して楽しく食事ができ



たら多世代交流の場としてもいいですよ。

小瀨 社会課題の解決に立ち向かうのは企
業の大切な役割ですが、企業単体での取り
組みには限界があります。皆さんのような
子ども食堂と私たちカスミ、そして地域社
会の連携で多くの人たちの意識や行動が変
わるような活動をこれからも続けていき
たいですね。最後に子どもたちにメッセージを。
笠井 今は大変でも絶対に生きていけるか
ら、投げ出さずに今を大切に生きてほしい
と思います。もちろん、それは子どもだけ
でなく、困っている全ての人にそう伝えたい
です。そのために、私たちは活動の輪を広げ、
より多くの人に関わっていただけるよう橋渡
しをしていきたいですね。

小瀨 日本は決して貧しい国ではありません
。だから、自分が貧乏だったり、困ってい
たら、SOSを発信すれば必ず助けてくれ
る人が大勢います。人を信じて生きてい
てほしい、必ず生きる
道はあるから、と私
は伝えたい。そして
子どもたちのそうい
う声を聞く耳を持
つことがわれわれ大
人の責任です。

SDGsは世界共
通の大きなゴールと
いうだけでなく、目
の前の地域の人たち
の未来に向けた目
標であることを忘れ
てはいけません。今
日はありますがど
うもありません。

2020年10月19日、カス
ミではセンターにて収録



私たちが理想としているのは 「子ども食堂」のない地域社会(笠井)

貧困問題の本質は 希望をもてるかどうか

小瀨 食堂以外にも、無料学習塾や制服・
ランドセルの支援など活動は多岐に及んでい
ますね。活動内容はどのように広げてきた
んですか?

笠井 子どもには空腹以外にもいろいろな
困り事があります。パンツがないとか、靴
下に穴が開いているとか、一つひとつに
いるうちに事業内容が広がってきた感じ
です。卒業式の親代理出席や入学式の準備、
住居の確保や病院の付き添いなど、とにか
く困り事はいろいろなので、「やれることを
やっていく」というのが方針です。

小瀨 一緒に活動しているスタッフは、どの
ような方々なんですか?

笠井 年齢は10代から80代まで、男女間

わず、約100名のボランティアスタッフ
が関わっています。主婦、学生、働き盛りの
男性、定年退職後の方、本当にさまざま
です。

小瀨 働き盛りの男性もいらつしやる?

笠井 はい、特別なことをしなくてもいい
から多分関わりやすいんだと思います。お
にぎりなら握れますとか、小学生の勉強な
ら教えられますとか。いつ来ても、短時間
でも関わってくれるのいいかもしれません。

小瀨 今、地域のコミュニティはつながり
が希薄になっていますから、昔のように地域
のお年寄りや大人たちが子どもたちと関
わる場も減ってきています。

笠井 確かにそうですね。カスミさんのイ
ーティンコーナーでは、おじいちゃんやおばあ
ちゃんが座ってお話しているのを見かけま
すけどね。きつと心地よい居場所なんでは



しょうね。居場所って「さあ、ここが居場所
ですよ」という感じではないかと思
うんです。

小瀨 そうですね。いつでも誰でもいらつし
やいと門を開いていることが大事なんでは
しょうね。食品の提供だけでなく、居場所の提
供もスーパーマーケットの大切な役割です。

笠井 子どもだって同じです。経済的にし
んどくて、居場所がないことが、その後の
成長や生き方、人格形成にどう影響する
か。それは計り知れないと思うんです。

もし成長段階で支援する大人や地域社
会との交流がなければ、生まれた環境に左
右されたまま生きていくことになり、結果
として自分の将来に希望や自信が持てな
くつてしまいます。

小瀨 貧困という食べるものがあるかな
いか、生きるか死ぬかという視点で考え
がちですが、実は子どもたちが希望を持
てて生きていくかどうか貧困問題の本質が
あるのかもしれない。

笠井 いじめられるという理由で、貧困
の子だけが集まる子ども食堂へは本当に支
援が必要な子が行かなくなるという批判が
ありますが、私は違うと思います。

子どもの貧困問題の背景には、貧しいこ
とが恥ずかしいことという意識がある気
が

します。でも、貧困
の子どもの親は決
してさぼって
いるわけでは
ありません。一
生懸命働いて
いるけど追いつ
かないんです。
特に今回のコ
ロナ禍では非
正規雇用や二
人親世帯など
経済的、社
会的に弱い立
場の人たちに
しわ寄せが
きています。

小瀨 大切な
のは取り残さ
れた人た
ちに対する
ケアなの
に、という視
点が行政に
は不足して
います。感
染防止策は
最優先事項
ですが、本
来ならコ
ロナ禍での
疾病予防や
健康維持で
は栄養補給
がとても大
事。困窮家
庭にもっと
食べ物や
居場所の
必要があ
ります。

笠井 そう
なんです。
本来なら
子どもた
ちが集ま
るために
私たちも
3月からは
休止して
各家庭にお
弁当を宅
配しました。

よかつたのは宅配することで、子ども
たちの家庭環境を直に感じられたこと。
玄関を開けた途端に困っていることが垣
間見えるんです。スタッフにも貧困を考
えるんじゃない、感じてもらえな
かと思

